

管内へのファームステイ 海外から問い合わせ増



ファームステイ先でピーマンの選果作業をする韓国の高校生

新鮮食材に憧れ 課題は滞在先確保

教育などの一環として、農家に滞在して農業の魅力に触れる「ファームステイ」を旭川市や近郊で行いたいという海外からの問い合わせが増えている。上川管内で受け入れ事業を手掛ける企業によると、

今夏も韓国の高校生64人が訪れた。北海道旅行の人気の高まりや、新鮮な食材への憧れなどが理由。一方で、受け入れ農家の確保が課題になっている。

(高田かずみ)

7月末、東川町の宇佐美昇さん(65)方で、滞在中の韓国の女子高中生4人がネギの出荷作業を手伝っていた。「自分で収穫したキュウリやトマトがとてもおいしくて、貴重な経験になりました」と白彩璘さん(18)。宇佐美さんも「言葉の壁はあるが、受け入れてみればみんな孫のようにかわいい。自分も若返るしね」と笑顔で語る。

白さんらは韓国の公益財団法人の日韓交流事業で来日。7月末から2泊3日の日程で、農家20戸に分かれてファームステイした。同法人の担当者は「韓国では健康的な食材が関心を集めており、地産地消を学ぶた

めに企画した」と話す。ファームステイの企画などを行う「アグリテック」(東川)によると、海外からの相談は5、6年前から韓国、台湾など東アジアを中心に、修学旅行や家族旅行の問い合わせが年間10件ほどあり、昨年は初めて、韓国とロシアから2件105人を受け入れた。

中田浩康社長は「民家の空き部屋に泊まる『民泊』など、『暮らすような旅』をしたい人が増えている」と分析。旭川周辺は富良野、美瑛、旭岳など人気の観光地が多く、問い合わせは今後も増えるとみる。

課題は受け入れ農家の確保だ。同社には管内の農家約90戸が登録しているが、滞在希望が農繁期と重なり受け入れ先が見つからない

ケースが目立つ。特に外国人は、言葉や文化の壁を懸念する農家も多く、深川市などの農家に引き受けてもらうこともあるという。

中田社長は「国外からのファームステイ受け入れは、上川の高品質な農作物を海外に広める好機。観光面での地域活性化にもつながる。農家が受け入れやすい仕組みづくりを工夫し、徐々にグローバル化を進めていきたい」と話している。